

奥琵琶湖の水辺で葦笛を吹く人

真田かずこ詩集『奥琵琶湖の細波』に寄せて

鈴木比佐雄

1

真田かずこさんの第二詩集『奥琵琶湖の細波』

を読み始めると、詩という言語体験ではあるが、いにしえに過ぎた生活を既視体験しているような不思議な思いに駆られてきた。なぜだろうかと考えてみると、真田さんの言葉が自らの奥琵琶湖の暮らしの中で発見していった一つひとつの出来事の記述に、読み手の深層にも届いてくる何かが秘められているからだろう。真田さんの書かれていることは、昔のことではなく現在の真田さんの生きている心情そのものである。しかしそれだけでなく四百万年〜六百万年前に出来た古代湖であると言われる琵琶湖そのものの美しさを体感して、

この詩集の言葉が溢れるように紡ぎ出されている。また真田さんは人間が決して想像し尽くすことが出来ない、未知の地球の地殻活動や宇宙の神秘などに深い敬意を抱いている。そしてこの世に出現してくる一瞬一瞬の「奥琵琶湖の細波」の繊細な変化に驚き、そんな琵琶湖に対する熱烈な讃歌がこの詩集に記されることになったのだろう。

真田かずこさんは、島根県浜田市出身で郷里を代表する詩誌「山陰詩人」（田村のり子氏主宰）の長年の同人だ。真田さんが全国の詩人たちにもかなり知られているのは、二〇〇四年一月に季刊の個人誌「トンビ」を創刊し、現在まで三十七号を出し続けているからだ。「トンビ」は、長4の封筒サイズで中綴じ十二頁の小冊子だ。開かないように左をシールで仮止めをして八十円切手を貼って送られてくる。表紙の上半分には住所氏名を書き、下半分には「トンビ」の誌名とトンビの

イラスト、そして「♪飛べ飛べトンビ 空高く♪  
♪ピーヨロ ピーヨロ 楽しんで♪」と記されている。私はこの極限的なシンブルな詩誌が着くたびに、私が「コールサック」（石炭袋）を創刊した当時の思いを想起させられる。詩やエッセイ、他者の優れた詩を紹介する詩論などを書いて発信しようという純粋な思いを「トンビ」から感じるからだ。「トンビ」は自分の詩だけでなく、多くの詩人たちの紹介や、憲法九条などの問題も真田さんの考え方を率直に語ってきた、個人誌にしか出来ない自由奔放さに貫かれていて。とてもしなやかで心暖かいものを感じるのだ。

真田さんは「トンビ」の他にも「現代京都詩話会」で三年間も代表を務めるなどの活動をしながら京都の南端の京田辺市に長年暮らしていた。そして二〇〇七年春に第一詩集『あたらしい海』を刊行した後に、滋賀県高島市マキノに転居した。

マキノは周囲二四一kmの琵琶湖の湖西に位置していて、真田さんの家の前には、琵琶湖の岸辺から水面が広がり、その先には神が住むといわれている竹生島も見える。気候は故郷の山陰地方に近いそう。冬には一メートル近い豪雪が積もることもあるそうだ。真田さんは終の棲家にしようと琵琶湖周辺を十年ほど探してこの場所に移り住んだという。真田さんにとって重要なことは、日々の暮らしを自分の感受性を大切にしながらいかに充実して生きるかということ、きつと生きることを芸術化したいという願いが込められているように感じられるのだ。真田さんはマキノに転居した後、地元にも勤める傍ら、琵琶湖の葦で作った葦笛を演奏する会を有志と立ち上げて演奏活動もしている。琵琶湖に飛来する水鳥たちや松林に来る小鳥たちの声を聞き、細波の繊細な移り変わりに心躍らせて、新詩集の詩篇が生み出されていったに違いない

い。新詩集を紹介する前に第一詩集『あたらしい海』についても触れておきたい。

## 2

第一詩集『あたらしい海』は、三章に分かれた四十六篇から成り立っている。一章十八篇は、故郷の海辺の町で育った家族との思い出や地域への郷愁が中心テーマになっている。その湧き上がり溢れて来る郷愁を通して、真田さんが自分の感受性とは何かを検証している詩篇のように思われた。冒頭の詩「あたらしい海」は、父の遺体の火葬をした煙が天に昇っていく際に見かけた「見慣れない海」に新たな命の再生を予感させてくれる詩だ。「和たんす」、「里帰り」、「誕生日」、「寝坊」、「遠い日の食卓」などは、父母や姉姉と郷土の海辺の風景などの自分を形作ってくれたものたちへの感謝に満ちている詩篇だ。二章の十三篇は、京都な

どの都市の中にある文化や残された自然を見出して、そこから生きるエネルギーを見出していく詩篇だ。三章十五篇は、真田さんの詩的言語の意味を自問したり、自然との交感をしてしまう内面の課題を詩に語らせながら、新たな生き方を模索している。三章の中の詩「遥かな女性」という詩は、当時の真田さんの正直な内面を語っていると思われるので、次に引用してみたい。

### 遥かな女性

あなたは驚くかもしれません

こんな歳になってやっと

開けていた目が動くようになったなんて

沢山の声が聴こえるようになったなんて

あなたは笑うかもしれません

こんな歳になってやっと

自分の言葉を喋れるようになったなんて

一人で遠くまで行けるようになったなんて

朝顔のつるのように

巻きつきながら

女は損だ 女は虐げられていると

花を咲かせ

うっとりしてはいなかったかと

踏みしだかれても立ち上がる雑草に

細くても倚りかからないで立つ雑木に

何故ならなかったのかと

あなたは責めるかもしれません

責められても悲しくはない

あなたの笑い声は 私のあこがれ

原始の太陽の  
雲間からこぼれた その光

この詩を読むと、「開けていた目が動くようになった」ように、今まで見えていたが気付かなかったことを感受し始めたという。また「沢山の声が聴こえるようになった」とも言っている。きつと第三の眼や第三の耳のような心の視聴覚が真田さんの中で、見聞きし動き始めたのだろう。「あなた」とは、そんな真田さんの試みを見守り励ます「原始の太陽」のような人間の存在を超えた大いなる「存在の光」を指し示しているのだろう。真田さんはこのような詩を書きながら、「原始の太陽の光」を求めて新たな故郷を探し求めようと決意したに違いない。そんな「あたらしい海」とは、新たに生き直そうとする水辺の場所であり、奥琵琶湖の地であるマキノだった。

私の暮らす千葉県柏市には周囲約三十八km（中心部分は約二十km）の手賀沼がある。都内に住んでいた学生時代が終わる頃から住み始めて三十年近く経つ。この地に住もうと思ったのは、手賀沼の水辺の風景に心惹かれたからだ。宮沢賢治の詩や童話の影響で自生している野草をはじめ、その場所に生息する水鳥や渡り鳥や動植物に関心があり、沼の周辺の野草や田畑や斜面の自然林などを週末になるとジョギングをしながら見ることが楽しみだった。当時の手賀沼は全国の湖沼の中でCOD（化学的酸素要求量）の値が高く最も汚れた沼と言われていた。それでも葦原が広がり生活排水が流れ込んでくる汚れと戦っているように思われ、何か清々しい気持ちにさせられた。最近には浄化装置を設置し利根川の水を引いてくる北千葉導

水路によって改善されてワースト一〇前後になっているらしい。ただ実際の水質汚染は変わらないのだが、水を希釈して利根川に押し流しているのが実情だともいわれている。人が生きていくためには、何らかの水辺が必要だ。人がこの世に留まることは、極言すると日々の水の恩恵にいかん恵まれて、生かされるかだと思われる。一杯の水を飲むことのありがたさを忘れてはならないので、その水辺を汚す行為は避けなければならないと思う。真田さんの奥琵琶湖の水辺へのこだわりもまた、人が生きることの根本に水との交流があることを伝えてくれている

新詩集『奥琵琶湖の細波』は、序詩と三章に分かれた詩篇二十九篇と四章の「湖畔の暮らし」（二十三篇）から成っている。序詩「水鏡」には、この詩を書かせた存在が気にかかってくる。

## 水鏡

朝

湖で

黄金の水を汲み

夕べ

空に撒く

無限の命を  
生む

湖を囲む

山々

水鏡に

姿を映し

装いを凝らす

飛び散った滴は

夜空に輝き

暁のころ

湖に

もどる

零れ落ちた

星々

湖に宿り

この序詩の中で朝に水を汲み夕べに水を撒くのはいったい誰だろうか。それを真田さんは「無限の命を生む」存在と語っているかのようだ。その存在とは、突き詰めて言えば、古代から近畿地方の命の源泉であった琵琶湖の水を再認識することなのだろう。琵琶湖の周りの山々が四季の姿を湖面に映し出すように、湖畔に暮らす真田さんも自らの姿を湖面に照らし出し、「無限の命」の細波

を感じたいと願って詩作したことを告げたのだろう。人は「無限の命」を感じ取ることの出来る聖なるものを感じ取れる時に、素直に自然体になり他者へその感動を語れるのではないか。そんな思いを抱かせる序詩だった。

一章「奥琵琶湖」十五篇は、詩「心地」から始まり、マキノの地が「身体が覚えている／日本海氣候」を甦らせてくれ、この章が奥琵琶湖の具体的な光景に連れて行ってくれることを暗示している。詩「波の音」では「こわばった身体」が「ほどけてゆく」「もどつてゆく」「馴染んでゆく」などの身体の内側からの変化を示している。詩「風の音」では、「波の音」「小鳥のさえざり」「松籟」「虫たち」などに鋭敏になっていく。詩「湖と海」では、琵琶湖が穏やかで深遠な海のように感じられてくる。詩「奥琵琶湖」では、「ただただ湖を眺めて暮らすことは可能だろうか」とい

月」が水面に映る光景の神秘的な感動を伝えていく。詩「夕立Ⅰ」「夕立Ⅱ」では、琵琶湖の夕立の賑やかさと、夕立後の洗われたような光景の美しさを描いている。この一章の詩篇を読むと「奥琵琶湖の細波」の奥深さを体験できたような思いがしてくる。

二章「朗らかな春」七篇は、琵琶湖の四季の野草、樹木、鳥などに会った喜びを記した詩篇だ。詩「朗らかな春」では、浜ダイコン、ニンソウ、レンギョウ、黄水仙など。詩「梅雨」では、青々とした葦の中でヨシキリの鳴き声や湖の生き物たちの呼び声に耳を澄ましている。詩「初夏」では、散歩の途中での小鳥やトンビや青鷺や鴉などの息づかいが聞き分けられている。詩「夏」では、故郷の夏山を回想し、現在の故郷の稲田、水路の藻を眺めながら蟬の声に浸っている。詩「晩秋」や詩「冬は」では、琵琶湖の晩秋の光や冬の透明な

う根源的な問いを発している。詩「新天地」では、マキノの地で挨拶する人たちが一人ひとりの固有の存在であることに気付いていくことに驚いている。詩「満ちる」では、「モーツァルトなしには／過ごせない日々だった」のが、「自然が奏でる音のない音が／こころに響く」ようになっていく。詩「松並木」では、家から見える松並木が家族のように親しく感じられて松並木の魅力を感じている。詩「波の關係」では、「日本海の荒波」と「びわ湖のさざ波」の二つの故郷の波を慈しんでいる。詩「三昧」では、野面の「土葬の共同墓地」があっけらかんとしてあることに親近感を抱き始めている。詩「マキノの虹」では、虹が珍しいものでなくなり、虹に匹敵する季節の自然現象に驚いている。詩「日課」では、一日の初めに琵琶湖の周辺の神様仏様に感謝している。詩「バラ色の月」では、「うす紅のバラのような満

大氣の美しさを記している。

三章「美しきもの」七篇は、マキノで出逢った存在者たちを興味深く刻印している。それは真田さんの菜園の青虫や蛇、遅しい農夫や農婦、里山に下りて来る猿、琵琶湖の魚介類たちなどについて近親者のように記している。

四章「湖畔のくらし」は、エッセイとも散文詩とも読める個人誌「トンビ」に連載してきた作品だ。マキノの暮らしの細部が記されているだけでなく、琵琶湖の漁法や竹生島などの湖西の歴史・文化がさりげなく紹介されている。湖西の暮らしをもっと知りたいと思う方にはとても興味深い内容だろう。

装画には滋賀県大津の画家である福山聖子さんが真田さんの家の近くでこの絵を描いてくれた。福山さんは滋賀の町や村の懐かしい風景を細密な鉛筆画のタッチで描き続けている。今回の装

画もその透明な光と影が注がれている石垣の間から見える湖面の細波に惹かれて、私は今にも下りたくなってくる。また帯文はマキノ町に隣接する新旭町の針江生水はりえのしづなずなどの川端文化かわたんかの研究者で知られる農学者であり現在の滋賀県知事である嘉田由紀子さんが書いてくれた。嘉田知事は「もったいない」というスローガンで資源の有効利用の観点から新幹線の新駅やダム建設公共事業などを断念させ、また県民の命と環境を守るために三〇km圏内にある福井県大飯原発再稼動を決して認めていない。一人の個人として嘉田さんが琵琶湖の美しさを讚美する真田さんの詩や福山さんの装画などを高く評価して帯文を書いてくれたこと

は、かけがえのない琵琶湖の自然を守り再生を願う同志だと考えたからだろう。嘉田さんの研究者としての原点は、マキノ町の知内村の湧水利用の調査分析や琵琶湖治水史などで、それらの研究が

収録された『水と人の環境史―琵琶湖報告書』（一九八四年刊、鳥越皓之氏たちとの共著）に結実されたという。嘉田さんと真田さんは葦笛の演奏会などで交流があったと聞いている。最後に詩「奥琵琶湖」を引用したい。多くの琵琶湖を愛する人びとにこの詩集『奥琵琶湖の細波』を読んで欲しいと願っている。

#### 奥琵琶湖

ただただ 湖を眺めて暮らすことは可能だろ  
うか

夜明けまえ 漁舟が静かに視界を横切つてゆくのを

お日様の黄金の道が 湖面を走つてやつてくるのを

水辺の柳はみどりに霞み 桜の花びらが波形

にただようのを

ただただ 湖を眺めて暮らすことは可能だろ

うか

きらきら輝く水面みなもに 小魚たちが跳ねるのを

葦 青々とそよぎ 人の背をはるかに超えて

ゆくのを

夕焼けが湖に色を差し バラ色の月が昇るのを

ただただ 湖を眺めて暮らすことは可能だろ  
うか

満月が照らす湖上に 光の舞台あらわれ わたしを差し招くのを

湖山空 青のグラデーシオンにユリカモメ乱

舞するのを

紙を貼つたように島影も見えず ころころの  
だけが映るのを

ただただ 湖を眺めて暮らすことは可能だろ

うか

風が吠え はるか沖まで白波がたち 松並木

が踊り狂う姿を

鉛色の湖面に 雪のドットが降りしきるのを

雪に映る松影に 小鳥が足あとをつけてゆく  
のを

真田かずこ詩集『奥琵琶湖の細波』さいなみ 栞解説文  
鈴木比佐雄

コールサック社  
2012